

### 論文審査結果の要旨

本論文は、英語の多重 *wh* 疑問文において、構造上上位の *wh* 句が文頭へ移動すれば文法的であるが、下位の *wh* 句が上位の *wh* 句を越えて文頭へ移動すると非文法的となる優位効果の派生のメカニズムと多重 *wh* 疑問文における解釈の問題を一般原理に基づく独自の分析で解明しようとしたものである。生成文法理論研究においては、ミニマリスト統語論が近年盛んに研究されており、中でも Chomsky (2008)において提案されたフェイズ理論の有効性が着目されている。本研究は、フェイズ理論の多重 *wh* 疑問文の分析に関する不備を指摘し、独自の提案を加えることにより、多重 *wh* 疑問文の派生と解釈の問題が統一的に説明できることを詳細に実証し、フェイズ理論の妥当性と新たな可能性を明らかにしたものである。さらに、英語以外の言語の多重 *wh* 疑問文の文法性についても説明可能であること、そして、否定対極表現の認可現象や束縛変項代名詞の認可現象のような他の現象にも拡張可能であることを提示することで、分析の妥当性を補強している。

本論文の第1章では、多重 *wh* 疑問文の一般的な文法的特徴を提示し、本論文で扱う主な現象を概観した。第2章では、本論文が理論的に基づく Chomsky (2008)のフェイズ理論を概説し、その枠組みにおける *wh* 疑問文の統語派生の説明を提示した。そして、Chomsky (2008)が提案するフェイズ理論における①フェイズ主要部からその補部の主要部への素性継承のメカニズムと、②移動操作の同時適用分析のもとでは、英語の多重 *wh* 疑問文の優位効果の文法性の対比が捉えられず、さらに、長距離認可の現象も捉えられないことを明らかにした。

第3章では、英語の多重 *wh* 疑問文の優位効果と解釈に関わる文法的特性と先行研究を概観した。まず、英語の多重 *wh* 疑問文は優位効果を示すが、優位効果違反の派生のように見えるにも関わらず文法的な事例が存在する。さらに、文法的である場合には、ペアリスト解釈・シングルペア解釈の双方が可能な場合と、シングルペア解釈のみが可能な場合があるという問題がある。そこで、Pesetsky (2000)と Stroik (2009)による先行研究を取り上げ、その理論的並びに経験的問題を指摘した。

第4章では、Chomsky (2008)のフェイズ理論に基づく多重 *wh* 疑問文の派生に対する新たな分析を提案した。具体的には統語構造がフェイズごとに意味部門へと循環的に順次送られた情報の矛盾を禁じる Ban on Contradictory Information (BCI)と、統語派生で矛盾が生じる場合、認可関係はキャンセルされるという make-up strategy ならびに、未認可の要素が転送されてしまう場合はその解釈可能素性がフェイズ主要部に引き継がれ統語派生上に残るという TAKE-OVER というフェイズ理論で独自に必要な統語操作を提案した。そして、*wh* 疑問文として節タイプが決定されるための条件と派生的 *c*-統御の定義に基づき、*c*-統御による多重 *wh* 疑問文の *wh* 句の認可条件を提案し、フェイズ理論において優位効果の文法性が適切に捉えられ、さらに様々な事例の文法性も捉えられることを示した。また、多重 *wh* 疑問文の *wh* 句の認可条件が同一フェイズ内で満たされればペアリスト解釈が導出され、異なるフェイズ間で TAKE-OVER により間接的に満たされればシングルペア解釈が導出されるという解釈原理の下で、解釈の問題も解決できることを示した。

第5章では、本分析によるブルガリア語と日本語の優位効果についての説明を提示し、英語とこれらの言語との言語間変異を *wh* 疑問文の節タイプパラメーターのセッティングの違いによるものであることを提案した。

第6章では、本分析の更なる妥当性を示す為、否定対極表現の認可と束縛変項代名詞の認可の統語派生と文法的特徴を、本分析により説明できることを示した。第7章で論をまとめた。

本論文は、主に英語の多重 *wh* 疑問文に関する実証的研究であるが、本研究の成果は、フェイズ理論の妥当性を検証するのみならず、統語派生の局所性ならびに、統語派生と意味解釈の相関に関する重要な基礎的研究として、生成文法における理論研究において大きな貢献をするものと高く評価することができる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士 (文学) の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。